

# ちゆと吸へば土用蛭もちゆと応ふ

藤田湘子

蛭の味噌汁、それも殻付き。土用の蛭は粒が大きくて滋養に富む。私は蛭汁の夜明け色が好き。鍋に入れる前に殻と殻をこすり合わせて洗う。手応えの硬さに比べて、水の中で小さな音を立ててお互いの砂を落とす風情がいい。水から沸かして殻が開き始めると、夜明け前の空のような、うすむらさきの世界が広がる。火を消して味噌を溶き入れると蛭汁の出来上がり。

小指の爪ほどの身が腕の底に沈んでいることが多いが、殻付きの物を手にとって「ちゆと吸へば」「ちゆと応」えるように口の中に納まってくれる。箸でつまむより、蛭との交感度が増すというもの。湘子はきつと蛭を愛していたと思う。「忝な土用蛭の大き粒」も愛誦句。

2004年 (H16作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京